

日本の性教育の問題点

著者	深江 誠子
著者所属(日)	平安女学院大学現代文化学部現代福祉学科
雑誌名	平安女学院大学研究年報
巻	2
ページ	35-45
発行年	2002-03-10
URL	http://id.nii.ac.jp/1475/00001172/

日本の性教育の問題点

深江 誠子

1. はじめに

小学生の性教育は2002年から4年生からと、時期は早められた。しかしその内容は以前とそれほど変わっていないのである。それから、総じて、親たちが、ほとんど子どもに性教育していない実態が、子どもたちの性体験のリスクを高めてもいる。実際、現在、性感染症はわかっているだけで、68万人。つまり、この数字は学校と親たちの性教育の結果ともいえる。

一体、日本の性教育は何を伝え、何が欠けているのか、また、どういう方向に変えていけばいいかを、模索するために、私は、自分がやった性教育の場、それが大学であろうと、社会人対象の講演会であろうと、アンケートをとり続けている。

私はこれまで、買売春について、かなり研究を重ねてきたが、そこに、突如としてエイズの問題が浮上した。ところが、学習していない日本の男性たちは、買売春で、いつのまにかエイズに感染する、というケースが激増している。エイズの最大のワクチンは教育だ、と言われていたが、この教育は一体どこでされているのか、と考えていくと、結局、日本では、ほとんどそういう教育を受ける場が、大人たちにも、子どもたちにも、保障されていないことがわかってきた。つまり、日本人のほとんどは、しっかりした性教育を受けていない、ということである。

また児童虐待も急増中である。これも、私はこの原因には主に3つあると思っている。一つはきちんとした性教育を受けていないので、避妊の知識もなく、妊娠すると「中絶は子どもを殺すこと」という思い込みで、若くして出産に至る。その結果、ヤンママたちの中には、自分の遊ぶ時間を奪われた悔しさから、子どもに暴力を振るうケースが多いようだ。第二はそのヤンママたちが、親離れしていない。だから、子どもをどう育てればいいのかかわからない。自分が支配できる赤ん坊の場合はいいが、歩き出して、目が離せなくなり、その上親に逆らうようになると、ついつい暴力を振るってしまうのだろう。第三は自分が誰からも愛情を注いでももらえなかった人たち、親から暴力を受けて育って、人を愛する術を教育されて来なかったことが虐待を繰り返すことである。

こんな風に、日本人の性のありようを見ていくと、結局は性教育の足りなさに大きな要因がある。もちろん買売春や児童虐待には他にも原因はあるのだが、もっと、親たちや教師が真剣に性教育をしていれば、防げた可能性は高い、と思われる。

2. アンケートの方法

現在、集計が済んでいるアンケートは165人でほとんどが、18歳から20歳前半の女性である。アンケートの結果では、女子大学生の女性が152人、社会人の女性は30歳代が5人、40歳代は4人、そして50歳代は4人だった。

対象が今のところ、女性だけに限られているが、とりあえず、この女性たちのアンケートから何が見えてくるかを、分析しておきたい。

このアンケート調査はそのほとんどが、私が講義を持っている女子大学と女子短期大学の受講生からとったものである。女子大学の場合は、現代文化学部の中の、現代福祉学科や国際コミュニケーションの学生たちで、講義のタイトルは「女性学」である。

30代、40代、50代の女性たちとは、私が依頼された講演会のうち、性教育について話した時のもの

である。性教育の講演会は中学校や高校にも行っているが、対象が多すぎて、頼みにくかったりする。

性に関しての調査は、これまでもさまざまにやられてきている。例えば『週刊ポスト』では1991年、全国2000組の夫婦対象に夫婦の性のアンケートを実施していた。これによると、夫が結婚以外で、セックスする率が48%というおどろくべき数字だったし、妻以外の女性とセックスするのは「刺戟を求めて」であることもわかった。この調査よりも、本格的だったのが、グループわいふのアンケートで、これが『性 妻たちのメッセージ』(グループ わいふ 径書房)という1冊の本にまとめられている。これを読む限り、夫婦のセックスは高齢になるほど、妻が逃げている、という実態、そして、夫婦の性も、強姦のようなものが少なくないことが見えてきた。

また、1999年にはNHKが性の実態調査に取り組んでいて、それがビデオになって放送もされ、そのアンケートの結果も私の手元にある。しかし、いずれの調査も、そのアンケートの結果から、一体どこで、何歳の時に、どんな風に性教育を受けたか、そして性の相談はどこでやっているのか、また、生殖に一番影響を与えている環境ホルモンについて、どれだけ意識しているかも、まったくわからなかった。それから、世界中で急増している同棲についての項目もなかったのである。

私のアンケートはそのことの他に、私の性教育がどれだけ、受講生に伝わっているかを確かめたくて、講義や講演の前と、私の性教育を受けたあとでとった。講義(講演)が、受講生にどんな変化を与えているかも、確かめたかったのである。

つまり、確かに小学校、中学校、高校で性教育の授業はある。しかし、問題はその中身である。単に医師が身体の説明と避妊の話に終始するだけでは、女と男の関係の作り方や、生き方がわからないままである。

私の性教育の内容は、「性と生」である。まず、私はエイズを含めた性感染症の実態を話したり、それを描いたビデオを見てもらう。そして、中絶については、やって欲しくないけれど、避妊が完璧でないのだから、万が一の場合は中絶も必要悪であることを話す。親になることの大変さも。私が中絶したときと現在18歳になる娘を産んだ時の相手との関係の違いや、自分の状況の違いを説明する。そして、神奈川県的女性センターが作った中絶のビデオで語られていた「中絶は子どもを殺すことではなくて、自分を生かすことなんだ」というセリフを伝える。そして、もし妊娠したら、産む、産まないは自分で決めてください、と強調する。そして、だからこそ、避妊が大切である、と避妊表の説明をする。そして、エイズの感染経路も伝える。

また、日本の昔は鎌倉末期まで、母系性社会であって、女性が財産を相続していたお陰で相手の男性は変わっても、出来た子どもは母親が育てていたこと、そして、欧米社会では、同棲するカップルが激増していて、フランスなどでは、1999年にパックス法案が制定されて、婚姻届を出さなくても、契約だけで、異性だけでなく、同性が一緒に住めるシステムもできたことを伝える。

それから、スウェーデンやフランスでは非婚の子どもへの差別はまったくないこと、これから、おそらく、家庭内暴力が増えるので、すぐ結婚しないで、同棲する方が、相手を見きわめるチャンスになる、またリストラが急増しているのも、これからは、男女とも働き、家事・育児ができないと、恋愛さえ出来ない時代であることを伝える。

そして、性教育に必要なのは、まず、第一に自分をかけがえのない存在であることを知って欲しいこと、第二には、自己決定力をつけていくこと、そのためには、自分の人生は自分で決めていき、失敗や傷つくこともいっぱい経験することだということ、そして、第三には、親離れ・子離れをすること。実際北欧3国(スウェーデン、ノルウェー、デンマーク)では、子どもが18歳になったら、全員家を出ている。羨ましいことに、北欧は福祉国家で、大学が無料、そして、18歳の子どもには、国が自立資金を貸してくれるから、18歳以上の子どもで家にいる子どもはほとんどいないことを話す。

そして親たちには、一番影響が大きいのは親たちとの関係で、両方が働き、両方が楽しそうに家事

・育児する姿をみせるのがいい性教育であると話す。

そして、避妊表を説明した折には、環境ホルモンの話もする。70種類の環境ホルモンで、今、男たちの精子が激減していること、女性がこれを取り込むと子宮内膜症になる、だから、最近是不妊カップルが増えていること、そして環境ホルモンはどんなものに入っているか、と詳しく話す。

それから、今18歳の私の娘との関わり方、小学1年生で性教育を始めて、4年生の時に「私を抱いてそしてキスして」という映画を見せて、コンドームを渡して、「もし、小学校の帰り道、ヘンなおじさんが、ヘンなことしてきて、逃げられない場合、これを使って、って言うのよ、そして、学校で先生に見つけられたら、母親が持っていけ、と言ったといいなさい」と伝えたことも。

私の子育ては18歳になったら、一人で生きられる子どもに育てることだし、スウェーデンでは国が15歳になったら、セックスOKなので、娘にも高校時代から、彼を泊めてもいいよ、と言ったことなどを話す。

私の話には、学生であろうと、社会人であろうと、かなりカルチャーショックをうけるようだが、話の最後には、ほとんどの人が納得してくれているのが、アンケートで確認できた。

3. アンケート結果と考察

165名のアンケート結果については、同じ年に滋賀県の3つの高校でとった、アンケート結果と比較できるものは、していこうと思う。滋賀県の3つの高校は男女共学で、最初のアンケートの原案は私が作成したのだが、途中でかなり、変えられている。高校生のアンケート結果は『もっと知ろう生・性と生殖』（グループ「かけはし」実行委員）から引用する。

◆性体験の有無、避妊、エイズへの関心

(1) NHKの「性の実態調査」では、高校生の性体験は36%だそうです。あなたは、性体験をしておられますか？

①ある ②まだない ③その他

この結果は①あるが112人で、②まだないは52人 ③その他は1人で、彼女は死ぬまでやりたくない、と書いてあった。この人はきっと家族でかなり苦労してきたのではないかと思う。ともあれ、これを見る限り18歳以上の女性は67%が性経験していることになる（図1）。

高校生では女性の31%、男性の28%が経験している。

(2) 最近、性感染症が急速に広がっていますが、予防はコンドームだけだそうです。あなたは、セックスの時、コンドームを使用されますか？

①コンドームは必ず使用する。 ②コンドームは時々しかしない。 ③しない。④その他

この結果は①必ず使用するが57人 ②時々使用は43人 ③使用しないは29人 ④のその他は10人で、ここの（ ）には必ずではない、性交しない、はじめはつけないで途中からつける、基本的にはしているが、しない時もある、と書いてあった。つまり、コンドームを必ず使用している人はセックスをしている人の約50%でしかない。時々する人も加えると、約90%にはなるが、かなり不安は残る（図2）。しかし、①の数字は性教育の後、倍の113人に増えた（図10）。

高校生では、避妊をしていない人は女性では29%、男性は28%、はいる。エイズを含めた性感染症と妊娠が気がかりである。

(3) はエイズは現在、厚生労働省の調査によると、約7000人も感染しておられます。あなたは、このエイズのことを、自分のことと考えて、予防しておられますか？

①自分とは関係ないと考えていた。②アブナイとは思っていたが、予防はしない。

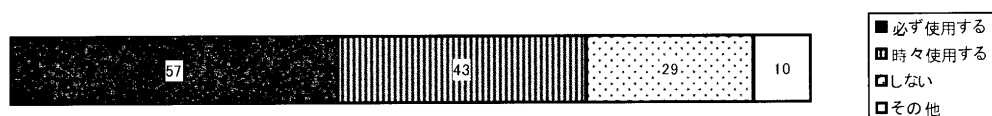
③セックスの時はコンドームを付けていた ④その他

この結果は①関係ないは41人 ②予防していないは38人 ③必ずコンドームをするのは36人 ④そ

〔図1〕 1. 性体験をしているか



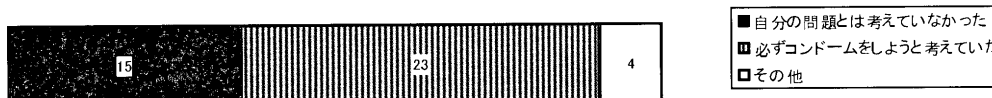
〔図2〕 2. コンドームを使用するか



〔図3〕 3. エイズの予防



〔図4〕 1で「まだない」と答えた方



〔図5〕 4. 性の知識をどこで得たか



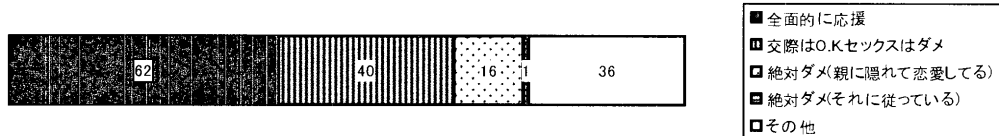
〔図6〕 5. 性の相談は誰にするか



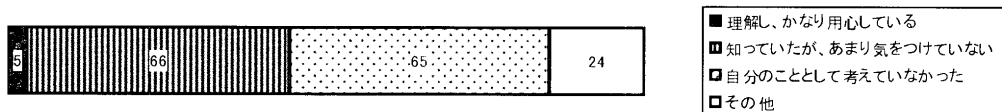
〔図7〕 6. 同棲についてどう思うか



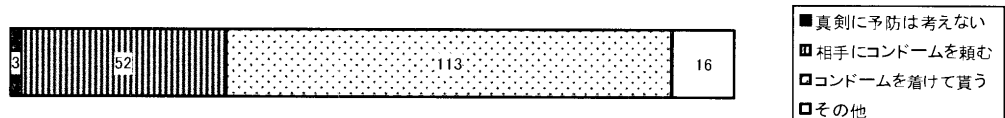
〔図8〕 7. 父母は恋愛を応援してくれるか



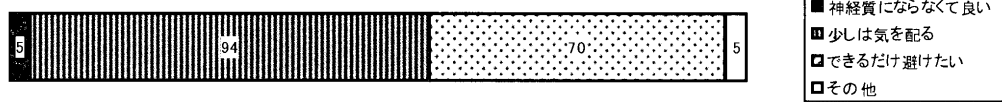
〔図9〕 8. ピルの有害性について



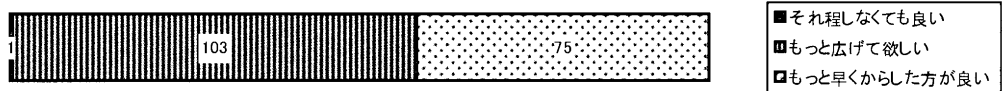
〔図10〕 1. 感染性について



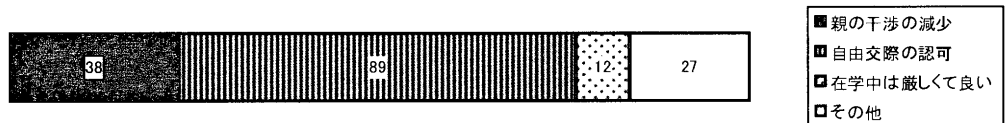
〔図11〕 2. 環境ホルモンについて



〔図12〕 3. 性教育について



〔図13〕 4. 親子関係はどうあってほしいか



の他は9人で、必ずコンドームを付けている人はなぜか36人に減っている。(2)では43人もいたのに。この差の7人はエイズ予防ではなく、単に避妊のためだけで、コンドームを使っていたのだと思われる。それにしても、エイズの問題を自分のことと、真剣に考えていない人が43人、自分のことと考えていても、予防していない人が36人いて、合計で77人、つまり、約60%の人がエイズの感染を防いでいない危険な状態にある(図3)。

性体験のない人に、①エイズを自分の問題とは考えていなかった。②エイズ感染を防ぐために必ずコンドームをしようと考えていた。③その他(),で質問すると、①の自分のこととして考えていなかったは15人、②の必ずコンドームを使うのは23人、その他は4人だった。約53%はエイズを自分のこととして考えていなかった(図4)。

高校生ではエイズを自分のことと考えていない人が50%もいる。とはいえ、大学生以上では64%もいるから、まだ高校生の方が関心をもっている。

◆性の知識はどこから、そして、性の相談はだれに

(4) あなたは性の知識をどこから得ましたか？

①親から()歳の時に教えてもらった。

②兄弟、姉妹から()歳に教えてもらった。

③学校から () 年生の時に習った。

④友人から () 歳に聞いた。

⑤その他

この質問の結果は、①の親からはたった7人だが、教えてもらった年齢は5歳、6歳、10歳、11歳、12歳、13歳、15歳とまちまちだったが、5歳や6歳から親に教わっている人がいた。②兄弟・姉妹からは6人で、教わった年齢は9歳、12歳が2人、15歳、16歳、17歳と少し年齢が高くなっている。③の学校からは84人で圧倒的に学校で習った人が多いのだ。年齢は小学1年生が1人、3年生は4人、5年生が15人、5年生は16人、6年生7人、5,6年生とあいまいなのが2人。中学校では1年生は12人、2年生は3人、3年生は4人。高校1年生は2人、2年生は1人。あとは教わった時期が不確かだが、学校で習ったが17人。④の友人からは46人で、9歳の時が1人、10歳が6人、11歳は7人、12歳は4人、13歳は3人、14歳は5人、15歳は2人、16歳は4人、17歳は2人、20歳は1人。あとは年齢不詳が11人。⑤その他は14人で、マスメディアが1人、雑誌は2人、覚えていないが6人、聞いていないは1人、あと4人である。この結果を見ると、ほとんど親たちは子どもに性教育していないことがわかる(図5)。

(5) でコンドームを必ず使っている人が少ないことを考えると、その性教育の内容が気になってくる。ただ、セックスの仕方やボルノ情報を教えられただけ、ということもあり得る、と思われる。その結果が68万人の性感染症の数なのだから(図5)。

高校生も、大体同じで、親からの情報入手はたった2%程度である。

(6) あなたは、性の相談はどこでしますか？

①親に ②兄弟姉妹に ③学校の先生に ④友人に ⑤カウンセラーに

⑥雑誌などの本で ⑦その他

この結果は、①の親には14人、②の兄弟、姉妹は9人、③の学校の先生はたった3人、④の友人は111人で、圧倒的に友人が多い。意外だったのは⑤のカウンセラーは0だった。しかし、カウンセラーに出会える機会も少ないし、相談にはお金がかかることを思えば当然ではある。⑥の雑誌や本は12人で予想以上に多かった。おそらく友人のいない人の選択なのだと思う。⑦のその他には14人で、誰にも相談したことがないがこの中で6人もいる。この人たちが少々心配である(図6)。

◆同棲と環境ホルモンについて

(7) 先進諸国では、同棲カップルが急増していますが、あなたは同棲についてどう考えておられますか？

①同棲は大賛成 ②他人がすることはいいが、自分はイヤ ③絶対にしない ④その他

この結果を見ると①は98人もいる。②は44人、③は7人で意外に少なかった ④は7人で、そのうち分からないが1人、できないが2人、別にいいとも悪いとも思わないが6人、気にしないが1人、結婚するにあたっては必要が1人、本人の自由は1人だった。大賛成が全体の約60%もいた。

とはいえ、先進諸国では今や、同棲が急増している。スウェーデンではサンボという同棲カップルは1990年で52%(注1)、平成10年の「厚生白書」では55%に上昇、フランスでも、500万人が同棲していると、NHKのビデオでは描いていた(注2)。デンマークやイギリスも年々、同棲が増えている(注3)。

私は家庭内暴力を防ぐためにも、一度相手と暮らしてみる必要性はあると思っている。付き合い、と実際の暮らし方とはまるで違う相手もいるし、年間100人以上、夫に殺されていること、女性の自殺者も約1万人。そして、離婚件数が一番多いのが、20代、30代であることを考えると、すぐに結婚することはリスクが高いのだと思えるからだ(図7)。

(7) あなたの恋愛にお父さん、お母さんは応援してくれますか？

- ①全面的に応援してくれる ②交際は認めてくれるが、セックスは絶対ダメ ③絶対ダメなので、親に隠れて恋愛している ④絶対ダメなのでそれに従っている。⑤その他

この結果は①の応援してくれている、は62人、②の交際はOKだがセックスはダメが40人、③の親に隠れて恋愛している、は16人、④は1人で、セックスを含めて親が応援してくれている人が約38%もいて、日本の親たちもかなり変わってきたことがうかがえる。⑤のその他は36人もいて、ここには、親たちへの不満も書き綴られている。「特に話はしないが」5人、「まだ子ども扱いをしている」「あまり何も言わないが、（親にとって）よくない人の場合はいろいろ言われる」「交際する気なし」「交際については何も言われなし、セックスもちゃんと予防しなさいと言われるだけ」「恥ずかしいから隠している」「もう少し、性教育を勉強して理解してほしい」「親に男関係を話さない」「親は知らない。性行為をしていることを知らないと思う」「恋愛のことで親に相談したことがない」「交際していない」「交際については認めてくれるが、性については話さない」。

しかし、④の絶対ダメな親に従っている子どもはたった一人である。NHKの性の実態調査では、高校生の性体験者は男女とも36%だし、親に認められているが112人のうち38人だから、他の人たちは、親が知っていて知らないフリをしているか、全く知らないかである。そういう意味からも、若い人たちのセックスがかなりリスクの高いものであると感じてしまう（図8）。

(8) 環境ホルモンのせいで、子どものできないカップルが増えています。昨年許可されたピルも1年間真面目に飲み続けたら環境ホルモンをどんぶり鉢1杯飲む計算になるそうです。そのことをご存知でしたか？

- (ア)わかっていたので、かなり用心して食べ物や避妊方法を選んでいる。
(イ)環境ホルモンについては知っていたが、あまり気をつけていない。
(ウ)環境ホルモンを自分のこととして考えていなかった。
(エ)その他（ ）

この結果①の用心していた人はたった5人で、②の気をつけていないは66人もいた。③の自分のこととして考えていなかった人は65人、⑤のその他は24人でそのうち、全く知らないが13人、あとは1人だがピルという言葉だけ知っていた、子どもができなくてもいい、ピルを使うつもりはない、高校の時、絶対安全だと習った、問題が良く分からない、使用したことがないで、全く知らない人が13人もいた、①の65人とこの13人が、今後、子宮内膜症にかからないか、とても心配ではある（図9）。しかし、この（ア）の数字は性教育の後、70人に増えている（図11）。

4. 性教育を受けたあとのアンケート結果

このアンケートは前述したように、私の性教育を受ける前と、受けたあとの両方で取らせてもらった。では私の講義を受けたあと、どういう項目でアンケートを取ったかと言うと、まず

◆避妊と環境ホルモンについて、どう変化したか

(1) 性感染症について、詳しく知ってこれからどうされますか？

- ①あんまり真剣に予防しようとは思わない、②かなりアブナイので、相手にコンドームをしてくれるように頼んでみる、③セックスをする時には必ずコンドームを持参してつけてもらう ④その他

この結果をみると、①の予防しないはたった3人で、②の相手に頼む、は52人、③の自分で必ずコンドームを持参する、はなんと113人にもなった。性教育の効果があつたのだ。また④のその他には、16人が○をつけていて、中にはこんな風を書いてある。「性交しない」が2人、「今の彼氏はずっとつけてくれているけれど、これからは、彼氏が買ったゴムを分けてもらって自分も持っていようと思

った」「不特定多数の人としないので毎回予防を完全にすることはあまり考えていない」「二人で検査に行って、絶対、お互い違う人とはしない」、である。つまり、性感染症が自分のことと自覚してくれたのである（図10）。

(2) 環境ホルモンについてどう思われますか？

①別に、環境ホルモンに神経質になろうとは思わない。②少しは食べ物や食器に気を配ろうと思う。③環境ホルモンを含む食べ物や食器はできるだけ避けていきたい。

この結果は①の別に神経質にはならないが、5人、②の少しは気を配る、は94人、③のできるだけ避ける、は70人で、合計164人が環境ホルモンに関心を持ってくれた。④は5人で、この中には「気にしすぎたら何もできなくなる」「避けられないと思う」と書いている人もいたが、全体に、私の講義の内容は確実に伝わっている（図11）。

◆これからの性教育と親子関係をどう考えるか

(3) こうした性教育についてどう思いましたか？

①は性教育はそれほどしなくてもいいと思う。②今日のような話は広げて欲しい。③性教育はもっと早く、小学生くらいに詳しくやった方がよい。④その他

この結果は①のしなくてよいは1人、広げて欲しいはなんと103人もあった。③のもっと早くからは75人、つまり、これまでのような性教育では、生き方の参考にならない、ということである。③は4人で、親から子どもにするのがよい、学びたい人だけ学ばばいい、今のままでいいが各1人ずつ（図12）。

(4) これからの親子はどうあって欲しいですか？

①もっと、親の干渉を少なくして欲しい。②自由に交際することを認めて欲しい。

③やはり、大学を卒業するまで、親が厳しくしておいて欲しい。④その他

この結果は、①の親の干渉を緩めて欲しいが38人で、②自由にさせて欲しいがなんと89人①と合わせると、127人で、大体約77%が親の干渉が厳しい、と訴えている。③の親が厳しい方がいい、と言うのは、10人、その他は23人。その中には、「何でも話せる」が6人いた。「厳しさも干渉もほどほどに、」が3人、「深江先生のような親がもっと増えて欲しい」「今のままでいい」「自由にさせて欲しいけど、自分でしっかりして生きたい」「話し合いをたくさんしてお互い分かり合いたい」「もっと、親子関係を上手にしていきたい」「もっと親子のコミュニケーションをとるべき」「子どもの意見を尊重してくれるが、厳しくするところは厳しくして欲しい」である（図13）。

◆性についての悩み

それから（5）にはご自分の問題で、悩んでおられることや、今日の話の感想、意見なりを自由に書いて下さい。の欄を設けたら、いろんな意見が書かれてあった。その中から抜粋すると、

- 環境ホルモンのことは知っていたが詳しいことは全然知らなかったの、聞いてよかった。
- 私が母親になったら、深江先生のように性教育を早くから子どもにしてあげなければと思った。
- 最近の子どもはませているから、小学生から性教育をしてもいいと思う。●人間が商品化している話、感染症の話、少なからずショックを受けました。●これからは、親の考え方も変わっていかねければ成らないと思う。●親も子離れた方がいい。はっきりなんでも教えてくれたので、とても面白かった。●先生の今までの体験とか娘さんの話とかにびっくりした。自分は全然自立できていないなあと改めて実感した●女性学をとってよかったです。性の話は、女性は必ず知っておくべきだと思うけど、男性も知っていないと意味ないと思いました。男の人にも先生の話を開かせたい。
- はじめ、小4からコンドームを持たせて大丈夫かと思ったけど、これからの時代、もっと早めに教えた方がいいと思った。中・高生だけでなく、小学生までもが性的被害をうけているから。
- 彼氏がやりたいと言ったらやってしまうし、しかもゴムを使ったり、はあまりしていなかった。今

日、詳しく話を聞いて、ゴムを使おうと思いました。●今日の先生みたいな母親だったら、何でも話せて相談したりできるが、今のままでは内緒で子どもをおろす人がたくさんいるでしょうね。

●私の親は本当に厳しいので、毎日がけんかです。私をそんなふうに縛り付けて何の教育をしたいのかと思う。先生の話をお親にも聞いてもらいたいと思った。●親の言うことを素直に受け入れるだけでなく、もっと自己決定能力をつけていきたいです。●先生話を聞いてすごく驚きや発見が多かったです。●親の干渉は私が働くようになるまで続くのでしょうか。早く自由にして欲しいです。

●今までちゃんとした性教育を受けてきていないので、もっと話を聞きたかったです。●やはりセックスをするにはコンドームを必ず付けなければと改めて認識しました。●私の親は頭が固すぎる。もし私の親が深江先生みたいな人だったら、わたしの人生は全く違うものになっていただろうと思います。●フランスに住んでいたのも、性教育、エイズは身近な問題でした。エイズ検査を受けるのはパートナーに対しての礼儀です。もちろん私も検査を受けています。

5. おわりに

私はこれまで大学の「女性学」や「ジェンダー論」の講義の1コマは必ず、「性教育」に当ててきた。その講義を受けた学生たちの感想文を読むと、これまでコンドームなしのセックスをしてきてしまったので、性感染症やエイズの検査に行かなければいけないと思った、と書いている学生がかなりいた。つまり、大学や短大でしっかり、性教育をしても遅いと感じざるをえなかった。

だから、私は高校生に向けて2001年に『わたしの性ってなんだろう～もっとステキに恋をしようよ～』を出版した。文体も高校生を意識して語りかけるように書いたし、私の娘が18歳だったので、娘との対談も巻末に掲載した。この本は驚くほどマスコミに反響があった。テレビやラジオ、週刊誌と、取材を受け、お陰で半年で増刷された。

ともあれ、前述したように、性感染症は68万人、そのうち女性は10代後半から20代にかけて増加し、その数は39万人にまで膨れ上がっている。またエイズは厚生労働省のエイズ動向委員会の調査では、2000年のH I V感染者は462人、エイズ患者が327人、累積ではH I V感染者は3905人、エイズ患者が1913人だが、リスクのある人は数万人ともいわれ、若い人の感染者が増加しているのが現実である。

高校生を含めて、アンケート結果を見ると、性感染症やエイズがまだまだ自分のこととして認識していない人が多いし、きっと、学校や友人、雑誌やテレビからは、それが自分にとって、大変、切実なものであることが伝えられていないのであろう。だからこそ、親たちの性教育が重要なのだが、その親たちも、しっかり、性教育を受けていないとすれば、勉強を始めてもらうしかない。

同棲についても、半数以上が応援する気持ちになっている。もうそろそろ、同棲がふしだらだという偏見から日本人も自由になった方がいいと思える。同棲を繰り返すことで、相手を見極める力も養えるし、家庭内暴力の防止にもなる。ただ、私の性教育を受けた後、かなりの人がコンドームの着用の大切さを感じてくれたようだし、環境ホルモンにも関心を持ってくれるようになっているし、性教育も早くからした方がいい、と感じてくれた人も多い。現在、親や教師の意識と子どもの現実とのギャップが大きくなっている。子どもは親に隠れてセックスしているのに、親や教師たちはまだ早い、と思い込んでいる。そのギャップが大きいほど、性感染症（エイズを含めて）や中絶が増加していくのである。

また、親たちの、子どもへの干渉も、子どもたちを悩ませていることがわかる。親たちは、きちんと性教育をしないで、干渉だけしているとすると、親子の関係は、ただ、陰悪になっていくだけだと、かなり心配になってしまう。

総じて、日本の学校や家族では、性に関してはまだまだ開かれていないことがよくわかった。

(注1) 伊田広行『スウェーデンの男女平等—その歴史、制度、課題(1)』大阪経大論集

(注2) NHK「世紀を越えて絆とともに生きる 第4集多様化する結婚の形」1998年4月4日

(注3) 平成10年『厚生白書』

参考文献

『もっと知ろう生・性と生殖』 グループ「かけはし」実行委員会

Problems with Sex Education in Japan

Masako FUKAE

It is surprising to discover the reality of sexual activity among young people in Japan. There are 680,000 people in Japan who have contracted sexually transmitted diseases(STDs) — among them are 390,000 in their late teens and early twenties. Although a survey shows that there are 6,000 people in Japan who have AIDS, it is said that the real figure may be more than a hundred times that.

The most effective way to prevent AIDS, STDs, and abortion is through education. Starting next year, public schools will begin sex education at the 4th grade. Even though they made the starting age earlier than it is currently, the content of sex education remains the same, and it lacks what is really needed.

Questionnaire surveys were conducted at junior college, university, and public lectures, before and after my sex education lecture. These results are compared with the results of surveys conducted by a group in Shiga called "Kakehashi," at three high schools last year.

It was found that only about 50% of the college students always use condoms. Among high school students, 30% of female students and 28% of male students do not use any contraceptive measures.

The results also show that their knowledge of sexuality comes mainly from school, friends, magazines, and other media. Only 4% of college students and 2% of high school students said that it came from their parents. The problem seems to be the content of information.

The end—result of information obtained from school and friends is the 680,000 people with STDs. Parents should educate their children, however, parents have not been thoroughly educated themselves. Therefore, it is necessary for parents to learn about sexuality.

The responses after my lecture include the recognized importance of the use of condoms, more interest in environmental hormones, and that attendees wished they had learned what was discussed in my lecture when they were younger.

Furthermore, regarding the relationship with their parents, students hope to have more discussion on the topic of sexuality, rather than being nagged. The findings from the questionnaire tell us that schools and families in Japan are not yet open, in terms of sex education.